

日付	曜日	活動内容 & 場所	備考
6月15日	月	Kita Sonnenkäfe	
6月16日	火	Kita Sonnenkäfe	
6月17日	水	移動：フランクフルト経由羽田行き	
6月18日	木	10：00 羽田空港着	

多様性を“特別な支援”にしない

— Kita Sonnenkäfer に学ぶ反差別的アプローチ（Anti-Bias）に基づく日常のインテグレーション保育」—

（2026 年 6 月 12 日、15 日、16 日）

研修施設：Kita Sonnenkäfe

2025 年 6 月 12 日、15 日、16 日の 3 日間にわたり、ベルリンにある Kita Sonnenkäfer を訪問し、Anti-Bias（反偏見教育）に基づくインテグレーション保育と家族支援について学ぶ機会を得た。本研修では、文化的背景や言語、障がいの有無など多様な違いをもつ子どもたちが共に生活する中で、どのようにして一人ひとりの育ちを保障し、多様性を尊重する環境をつくっているのかを学ぶことを目的とした。



Kita Sonnenkäfer は、ベルリン・ノイケルン地区に位置する定員 130 名の保育施設であり、約半数の子どもたちが多文化・多言語家庭で育っている。園ではアラビア語、トルコ語、ポーランド語、英語など約 14 言語が話されており、多様な文化や価値観が日常的に交わる環境となっている。園の教育実践は「Anti-Bias（反偏見教育）」「心理運動教育（Psychomotorik）」「言語発達支援」の三つを柱として構成されていた。

今回の視察を通して最も印象に残ったのは、園が考えるインクルージョンの捉え方である。園長の Andrea Müller 氏は、「すべての人は違う。私たちの仕事は、その子に何が必要かを見て、それを提供することだ」と語っていた。また園の資料には、「インクルーシブ教育とは、子どもが教育機関に適応することではなく、教育者や環境が子どものニーズに適応することである」と明記されていた。ここでは障がいのある子どもを既存の集団に適応させることが目標ではなく、すべての子どもが参加できる環境を大人が整えることが重視されていた。

この考え方の基盤となっているのが、20年以上継続されている **Anti-Bias**（反偏見教育）である。**Anti-Bias** では、人種、文化、言語、宗教、ジェンダー、障がい、貧困、社会的格差など、多様な背景を持つ人々が社会の中で経験する差別や排除について学ぶ。特徴的なのは、子どもへの支援方法だけではなく、保育者自身が持つ偏見や思い込みを振り返ることが重視されている点である。研修資料には、「問題児」「手のかかる子」「落ち着きがない子」といったラベルを保育者自身が無意識に子どもへ貼っていないかを考察するワークが含まれていた。子どもを変えることよりも先に、大人自身の見方や価値観を問い直すことから始める姿勢は非常に印象的であった。



Anti-Bias 教育には四つの目標がある。第一に、子どもが自分自身や家族に誇りを持てるようアイデンティティを育むこと。第二に、多様性を尊重する力を育てること。第三に、不公平や差別に気づく力を養うこと。第四に、差別や偏見に対して行動できる力を育てることである。これらは理念に留まるものではなく、園内の環境や日々の実践の中に具体的に反映されていた。園内には多様な家族の写真を用いたコラージュが掲示され、多言語の絵本や様々な肌の色や文化的背景を表現した教材が配置されていた。保護者が母語で読み聞かせを行う機会も設けられており、ドイツ語を十分に話せない保護者であっても、自らの言語や文化を園の資源として活かすことができる環境が整えられていた。

子どもの育ちを捉える視点にも大きな学びがあった。園では「できないこと」ではなく、「できるようになったこと」や「今まさに育ちつつある力」に注目していた。例えば、ドイツ語を学び始めた子どもが文法的に誤った表現をした場合でも、それを誤りとして捉えるのではなく、「言語の仕組みに気づき始めている」と肯定的に理解していた。また、「**Bildungs- und Lerngeschichten**（学びと育ちの物語）」という



記録手法を用い、子どもの興味や学びの過程を写真と文章で記録していた。さらに現在は **BeoKiz** という観察・記録システムを活用し、子どもの成長の瞬間を継続的に記録している。課題を探すのではなく、子どもの強みや可能性を見出し、それを保護者と共有する姿勢が貫かれていた。

（Fachkraft für Sprache）やインテグレーション専門職（Fachkraft für Integration）が配置されており、保育者と連携しながら子どもの支援を行っていた。インテグレーション専門職の Cindy 氏は、「子どもが社会や集団に参加できるようにするために必要な支援につなげることが私たちの仕事である」と語っていた。支援の目的は障がいや課題を改善することではなく、子どもの参加を保障することにある。保育者や専門職は日常の様子を丁寧に観察し、必要に応じて言語療法、作業療法、理学療法などの専門機関へつなぐ役割を担っていた。



今回の視察で特に印象的だったのは、保育園の中に **Familienzentrum**（家族支援センター）が併設されていたことである。そこでは保護者や地域住民を対象に、親子運動プログラム、図書館活動、読み聞かせ、工作活動、父親向け交流会、多文化交流会など、多様な活動が行われていた。活動は保育時間外にも実施されており、保護者同士が出会い、交流し、地域の中で孤立しないための場として機能していた。

Eingang 2



Familienzentrum Britz

Kontakt:
Telefon: 030 639 00 10
Fax: 030 639 00 10
E-Mail: familienzentrum@britz.de



BERLIN 

Eintrag:



今回の視察を通して学んだことは、インクルージョンとは障がいのある子どもを受け入れるための仕組みではなく、一人ひとりの違いを前提としながら、誰もが安心して参加できる環境をつくる営みであるということである。そして、その実践を支えているのは、専門職との連携や制度だけではなく、保育者自身が偏見や固定観念と向き合い続ける姿勢であり、保護者や地域住民を含めたコミュニティ全体の力であった。日本ではインクルーシブ保育が障がい児支援として語られ

ることが少なくないが、Kita Sonnenkäfer の実践は、障がいだけでなく、文化、言語、家庭環境、貧困などを含めた多様性全体を尊重するものであった。今後は今回の学びを園運営や地域子育て支援に生かし、子ども一人ひとりが尊重され、保護者や地域と共に育ち合う環境づくりを進めていきたい。

～ドイツ豆知識～

ドイツはヨーロッパ中央部に位置する国で、面積は約 35.7 万km²、人口は約 8,500 万人である。国土の広さは日本とほぼ同じである一方、人口は日本より約 4,000 万人少ない。そのため、都市部であっても緑地や公園が多く、ゆとりのある街並みが特徴である。

今回訪問したベルリンは、人口約 390 万人が暮らすドイツ最大の都市であり、政治・文化・芸術の中心地として知られている。街を歩いていると、歴史的な建造物と現代的な建築が共存し、公園や水辺が身近にあるだけでなく、壁画やオブジェ、ストリートアートなどの芸術作品が街の至る所に見られた。ベルリンの壁の一部を活用した「イーストサイドギャラリー」をはじめ、駅や街角にも個性豊かなアートが点在しており、芸術が特別なものではなく、人々の日常の中に溶け込んでいることが印象的であった。

また、ベルリンは多様な文化的背景を持つ人々が暮らす国際都市であり、多文化共生を大切にす地域でもある。今回視察した保育施設でも、子どもの違いを自然に受け入れ、多様性を尊重する **Anti-Bias** の考え方に基づいた保育が実践されていた。街全体に息づく「多様性を認め、一人ひとりの個性を尊重する文化」が、保育や教育の現場にも深く根付いていることを実感した。

→ベルリン自然史博物館 (Museum für Naturkunde)

世界最大級の恐竜「ギラファティタン」の全身骨格や、始祖鳥の化石など貴重な展示で知られる。



↓アンペルマンは旧東ベルリン生まれの信号機キャラクター。帽子姿のかわいらしいデザインがベルリン名物として親しまれている。



↓ベルリンの壁に描かれた、東西冷戦を象徴する壁画。自由と平和への願いを表現した、イーストサイドギャラリーを代表する作品。



↓ベルリン名物のプレッツェルや白ソーセージ、ドネルケバブなど、ドイツを代表する食文化を体験した。

